くまもとアートポリス
建築展 2021
2022.1.23
sun

みんなの家 シンポジウム

みんなの家って何だろう

—— 熊本と東北を　結んで ——

「みんなの家」から導き出される公共建築のポテンシャル。

2011年の東日本大震災をきっかけにはじまった「みんなの家」は、東日本の被災地では16棟、熊本地震の被災地では100棟余りがつくられ、被災地域のコミュニティの場として利用されてきた。東日本大震災から10年、そして熊本地震から5年が過ぎた今、これまでの活動と今後の課題を含め、「みんなの家」はどのような可能性を持っているのか。熊本と東北をオンラインで結び、7会場、20名のパネリスト参加のもと、シンポジウムを開催した。

第一部　「みんなの家って何だろう」

新型コロナウイルス感染症の拡大防止のため、熊本会場は無観客となったが、オンラインも含め500名以上が参加し開催された。曽我部氏の司会進行のもと、熊本会場、東北会場をオンラインで結び、「みんなの家って何だろう」という大きな問いに、「みんなの家」を設計した建築家たちが議論を交わした。東北、熊本におけるみんなの家の活用、プロジェクトを重ねるごとに課題を解決し、変化していく人と建築との関わりなど、事例をもとにそれぞれの立場に基づいた考えを披露した。「当事者意識」「普請」「居場所の実現」など、今後の公共建築のヒントとなり得る印象的な言葉が飛び交い、あっという間の120分間だった。くまもとアートポリスコミッショナーであり、NPO法人HOME-FOR-ALL理事でもある伊東氏は、「みんなの家を自分の家の延長として考えられるかどうかが、今後の発展を語る上で大きな意味を持っている」と第一部の最後を締めくくった。

熊本会場
ホテル熊本テルサ

桂 英昭、末廣 香織、曽我部 昌史、塚本 由晴、岡野 道子

益城町 木山のみんなの家

内田 文雄、西山 英夫

大津町 高尾野のみんなの家

千葉 学

西原村 袴野集会所

山室 昌敬

東北会場
せんだいメディアテーク

伊東 豊雄、山本 理顕、妹島 和世、柳澤 潤、近藤 哲雄、大西 麻貴、百田 有希

相馬こどものみんなの家

アストリッド・クライン、マーク・ダイサム、久山 幸成

新浜のみんなの家

古林 豊彦

第二部

熊本会場
「みんなで語ろう！ 熊本みんなの家ネットワーク」
東北会場
「新しいみんなの家をつくろう」

第二部は、熊本会場、東北会場それぞれの会場で、個別テーマについてディスカッションが行われた。熊本会場では「みんなで語ろう！ みんなの家ネットワーク」をテーマに、第一部のテーマとして語られた公共建築、当事者意識をもってつくられる「みんなの家」が果たす役割について議論が交わされた。建築物である「みんなの家」のあり方が、現代社会の構造を考えるきっかけになっていることが浮き彫りとなり、近代化による効率化と、地域のコミュニティとしての人のつながりの関係性を考えるきっかけとなった。東北会場のテーマは「これからのみんなの家」。会場からの質疑をきっかけに、建築の作品性、みんなの家の形、その時の状況や場所に合わせた使う人が愛着や誇りを持てる建築のつくり方の議論が交わされた。また、山本氏はみんなで考え、みんなで決める「みんなの家」は真の意味で公共建築であり、この活動を持続的に続けていきたいと語った。シンポジウム第一部の司会進行を務めた曽我部氏は、「新しい公共建築が持っている可能性について、議論で深められた」と振り返り、くまもとアートポリスのプロジェクトがもたらす、これからの公共建築への良い影響について期待を語った。

CHECK!
シンポジウムの映像を
アーカイブ配信中